

目次

ページ

第6回通常総会(平成20年度)報告	1
研究発表会 招待講演(山下和也氏)	2
招待講演(谷口守氏)	3
研究発表会	4
中国四国支部連携事業シンポジウム	7
第1回都市計画サロン(青山吉隆氏)	9
ホットコーナー・コラム(杉恵頼寧氏)	10
会員紹介(藤原章正氏、藤岡憲三氏)	13
今後の活動計画	14
編集後記	14

第6回通常総会(平成20年度)報告

1. 日時

平成20(2008)年5月10日(土)13:40~14:20

2. 会場

ホテル法華クラブ広島10階会議室
(広島市中区中町7-7)

3. 会議の概要及び議決の結果

(1) 総会の成立報告

司会の佐伯幹事から、議決権を有する正会員231名中、本人出席43名、委任状による出席81名、合計124名出席があり、支部規定第12条の要件、支部所属の正会員の1/5以上の出席を満たしていることから、総会が成立する旨の報告があった。

(2) 開会の挨拶

議事に先立ち、杉恵支部長が挨拶した。この中で、支部長退任の件を報告。また、会員数の動向について紹介した。



杉恵支部長

(3) 議長選出

議事に先立ち、支部規定の第7条により杉恵支部長が議長として選出された。

また、佐藤幹事と山下幹事に議事録署名人としての承認を得た。

(4) 議事

杉恵議長の進行のもとで承認された事項は以下の通りである。

1) 第1号議案 - 平成19年度事業報告

近藤副支部長が、会議、支部研究発表会、都市計画研究講演集の発行、学術講演会、都市計画研究会、シンポジウ



近藤副支部長

ム・見学会、支部連携行事及び総務活動の実績について説明し、拍手多数により承認された。

2) 第2号議案 - 平成19年度収支決算

佐藤幹事(総務委員長)が、平成19年度収支決算についての説明、続いて今田監査役から収支決算に対する監査報告を行い、拍手多数により承認された。



佐藤幹事



今田監査役

3) 第3号議案 - 平成20年度事業計画及び収支予算

松波副支部長が、平成20年度事業計画及び平成20年度収支予算書(案)について説明し、ともに、拍手多数により承認された。

なお、20年度収支予算(案)の中には、19年度受託した関連交付金が含まれ、これについては、予備費とすることを報告した。

4) 第4号議案 - 平成20年度~21年度支部役員改選

杉恵議長が、平成20年度~21年度支部役員改選(案)について説明し、拍手多数により承認された。

5) その他

松波新支部長が就任に当たってあいさつした。

また、司会より、石丸氏、杉恵氏の顧問就任が幹事会で承認された旨報告があった。



松波新支部長

(5) 閉会

以上をもって杉恵議長は閉会とした。

(文責：佐伯達郎)

招待講演

被爆建物を通じた都市の記憶と構造に関する一考察

- 過去と未来を繋ぐ道標としての被爆建物 -

山下和也((株)地域計画工房)



「ヒロシマをさがそう - 原爆を見た建物 - 」(2006)は、被爆建築物を対象とした物語と記録の書であるが、山下氏はその著者の一人であり、この成果を踏まえての研究発表であった。

紹介された被爆前・被爆直後の都市と建築、そして今でもひっそりと生き延びている被爆建築物などの数多くの写真や、それにまつわるストーリーは貴重な記録であり、また被爆建築物を今後の都市計画に援用していく発想は、創造性に富むものであった。

「ヒロシマ」は、戦後60年を経てもなおその物語性を失ってはいない。例えば映画界では、最近の作品として「父と暮らせば」や、こうの史代原作の「夕風の街桜の国」などが若い作家によって生み出されており、後者には被爆建築物が現在の広島風景の一部として、写し出さされていたように記憶している。

1. 発表要旨

被爆建築物は歴史的建築物の一種であるが、猛烈な破壊力に耐えたという意味で特別な建物である。被爆直後は156件が確認されているが、その後利用されたり、現在でも利用されているものがその2/3に上り、復興期における広島の市民生活を支えた。ちなみに、現存しているのは34件であり、一部が保存・展示されているものが14件である。

(1) 被爆建築物の有する役割、意味性

・現在残されている被爆建築物も被爆で大きなダメージを受けたが、それを補修してこれまで活用してきた。

・都市の魅力と深みの重要な要素は、脈々と受け継がれてきた歴史を、建築物を通して感じることができることである。

・被爆者はいずれいなくなるが、原爆の記憶を後世に伝える力は残されているのだろうか。被爆建物は人よりも永らえて、人と様々に対話し想像力を引き出す力を持っている。被爆建築物は現代人が8月6日と同じ場所に立てる「等身大の空間」ではないか。

(2) 被爆建築物の活用

・福屋百貨店やアンデルセンは、外壁の一部を残しながら改修して、商業施設として活用している。

・旧日銀広島支店は、当時の外観や骨格をほぼ残しながら、展示発表空間として再利用している。

・袋町小学校の一部は、まちづくり市民交流プラザとの複合建築物として、資料館の役割を果たしている。等々

(3) 被爆建築物のこれまでの都市計画への活用

・広島は、築城以来350年間は広島城とその周辺を中心とした都市構造であったが、被爆後に丹下により提案された広島の復興都市計画は、原爆慰霊碑と原爆ドームを繋ぐ線を都市軸としている。これがその後の総合計画での都市軸の考え方の下敷きとなった。

(4) 被爆建築物の今後の都市計画への活用

・軸線を重視した都市づくりが重要であり、丹下の都市軸をベースとしながらも、被爆建築物を重ね合わせた新しい都市軸を位置づけてもいいのではないか。

・すなわち、象徴的なもの以外に埋もれている小さな建築物等の再評価が必要なのではないか。

・また丹下の都市軸を活かす上でも、岡本太郎の「明日の神話」のレプリカを現球場の跡地に設置する意義は大きいのではないか。

・利用が定まらず放置状態にある広島大学本部跡地にある旧理学部1号館は、被爆建築物を活かした「広場」として活用できないか。最後に残された被爆建築物として、よりシンボリックな活用も期待される。

2. 所感

最近では、各地の産業遺産に光が当たり、産業遺産ツアーというの生まれようとしているが、それは機能を失った建築物や生産設備においても、その場所において発信できる絶対的な意味性を有しているからである。

山下氏が指摘されるように、「被爆建物は、そこを訪れた人々と様々に対話し想像力を引き出す力・可能性を持っている」。都市空間を単なる機能空間としてだけでなく、創造空間として捉える時代に移行しつつあるなかで、歴史文化や芸術性を積極的に都市づくりに導入する方法が注目されているが、被爆建築物も記憶の装置としてだけでなく、「活かす発想」が必要であろう。国際平和文化都市を標榜する広島の都市づくりにおいては、被爆建築物の活用について今一度再検討する意義があると思われる。

被爆建物のなかでも一般市民になじみの深い旧日本銀行広島支店は、貴重な大空間と省スペースを活かして、芸術家の想像力をかき立てる創造空間としての可能性を秘めているだろう。建築物ではないが被爆と復興の記憶をとどめる平和大通りや平和記念公園も、同様の文脈で祈りだけでなく平和を創造・表現する空間として活用されることへの期待も大きい。等々、建築物としての当初の機能を失った被爆建築物に、再度生命を吹き込み、メッセージ性を持った都市づくりを進めることについて考えさせられた。

(文責：佐藤俊雄)

招待講演

低炭素型社会に向けた都市構造づくりを考える

谷口 守(岡山大学大学院・環境学研究科 教授)

我が国では、都市構造の集約型構造への転換を通じて、中心市街地の活性化と環境負荷の低減を同時に実現しようとする動きが見られるようになった。本講演は、居住者の自動車利用によるCO2排出をいかに削減するかという低炭素型社会の実現の観点から、これからの都市構造づくりの考え方を示すものである。



1. 集約型都市構造とは

集約型都市構造についての理解は、時として無用の誤解を誘発する場合がある。高層ビル群が密集し非常に高度な土地利用がなされていることが、必ずしも望ましいコンパクトシティとは言えない。高密度化した米国ロサンゼルス为例に見ると、一人当たりの自動車燃料消費は東京の5倍以上に達し、一方でそれほど高密度でないドイツのカールスルーエは、居住者一人当たりの交通環境負荷が相対的に小さい。これは都市圏全体で120kmのライトレール網が整備され、沿線居住者はこれを利用して都心まで移動するなど公共交通によるまちづくりが実現していることに起因し、結果として都心は平日でも多くの来訪客で賑わいをみせている。このような公共交通コリドールに沿った形成都市では、交通の観点から言うコンパクトシティの定義は、交通環境負荷を下げる都市構造であり、環境、経済、社会の3点セットでコンパクトシティを考えることが必要である。

2. 我が国の諸都市における現状

我が国の38都市における居住者によるCO2排出量を全国パーソントリップ調査データに基づいて算出した。

その結果、都市全体の居住密度が高まるほど一人当たり自動車CO2排出量が少なくなる傾向があるが、地方都市や地方中心都市では、都市の市街化区域人口密度が低いものの、一人当たり自動車CO2排出量の値に幅が生じている。例えば名古屋、広島、長崎の3都市の人口密度はほぼ同じであるが、この順で自動車依存が高いことも特徴的である。また経年的変化を見ると、どのような都市分類においても、現在まで一貫して一人当たりCO2排出量が増加していることに注目する必要がある。大都市圏衛星都市の例で見ると、公共交通網とリンクした形で「意味のある」密度の高さを維持することが、少なくとも現状から大きく悪化しないための重要な条件と考えられる。都市構造づくりの中で公共交通のターミナルを核とした密度のリズムを組み込み、それらを相互に調和するようにリンクさせていくことが最低限の方策として必要である。

3. 密度のリズムをつくる

カールスルーエには市街地全体にわたってLRTのターミナルを中心とした住宅密度コントロールがABCDの4段階で実施されている。この順に想定される住宅密度は低くなるが、何れもLRTターミナルから半径300mの地域であり、一番想定密度の低いD地区でも周辺の未指定地区より住宅密度を相対的に高くしようとしている。このような市街地全体の住宅密度のリズムが必要である。

4. 郊外ショッピングセンターの衰退と郊外中心地づくり

米国デンバーでは、古くからのショッピングセンターの多くは、衰退や閉鎖という問題が現実には生じ、郊外ショッピングセンターもシャッター街化している。1968年に開業したシンデレラ・シティが1997年に閉鎖したケースはその一事例である。ここではショッピングセンターの建物再利用を含めて住宅公共施設を用途混合し、さらにLRTのターミナルを地区内に設置し、それを軸として新しいまちづくりが行われた。このLRT路線は都市圏の中心都市であるデンバーの都心に直結しており、このような市街地と公共交通の整備を通じてデンバーの都心商業地が繋がったことから、郊外からの買い物客で以前より賑わいを増している。

5. モラルとマナーをかえていく

環境負荷が低く、地域活力を備えたあるべき都市構造を実現していくためには、「拡がって住まない」ということが居住者の間に当然のこととして受け入れられていくことが必要である。規制や理屈としてコンパクトシティ政策を押しつけるのではなく、新しい時代のマナーであり、モラルであるという理解が広がることに期待したい。都市の住まい方に関するマナーやモラルも、時代とともに変わっていくものと感じている。都市構造を考え直していくことは簡単ではないし直ぐにできることでもない。しかし、それは環境負荷の面において長期的に重要な意味を持っている。それだけに都市構造づくりはある程度の時間を要する居住者のモラルの変化とリンクさせる意味がある。低炭素型社会に向けた都市構造づくりはまだ始まったばかりである。

最後に聴講者の一人として筆者の感想を綴りたい。

地球環境問題は国際的な政治問題へと発展し、更にはバイオ燃料に端を発する経済をも揺るがせ、言わば世界的な関心事と言えよう。こうした中でコンパクトシティは、まちづくりの視点からその解決の切り札として推進されてきたが、谷口先生は交通問題からアプローチし、交通システムとまちづくりが連携して初めてコンパクトシティが成立することを提唱された。高層神話と言われるほど高層化に魅力をもつ事業主が多いと聞いたことがあるが、高層化することがコンパクトシティではないことを強調された。科学的分析に基づく理論展開と、モラルとマナーを礎としたまちづくりのパラダイムシフトに真髓があるのかもしれない。

(文責：周藤浩司)

研究発表会

中山間地域における活動パターンに関する基礎的分析

嶋本 寛 (広島大学大学院国際協力研究科 助教)

本研究は島根県中山間地域において実施されたアクティビティダイアリー調査結果を用いて、客観的な活動パターン分類手法(SAM - Sequential Alignment Method)により活動順序も加味したパターン分析を行ったものである。



分析の結果、自動車により自由に移動を行っているクラスターとそれ以外のクラスターに分類することができた。また、自由に移動できないクラスターにおいては高齢者の比率が高く、また移動に困難を感じている人の割合が高いことが確認された。

今後の課題として、活動時間等の量的な差による違いを表現できるよう評価手法の改善が必要なことと、今回の分析は1日のデータであるが1週間データを用い個人内行動の多様性の差についても分析の必要があると報告された。

質疑応答の中では、現実に自由に移動できない人は子供や介護者の支援により行動しており、誰かに助けられている活動パターンを明確に分類できることは重要ではないかという意見がなされた。

都心居住を考慮した都市施設の配置評価モデルとその適用 近藤 光男 (徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 教授)

本研究は、高齢者の居住を考慮した都心地区での居住空間を創出するために、高齢者を対象にした住民意識調査(865 サンプル、内高齢者 378 サンプル)にもと



づいて、居住環境を評価するための評価指標及び評価関数モデルを作成し、徳島市中心市街地に適用し、現状の居住環境に関して考察を行ったものである。

都市施設の重要度では、警察や交番、郵便局や銀行が最も高く、次いで病院、医院、診療所となっており生活に密着施設の重要度が高い傾向が確認できたと報告があった。施設に対する満足距離では、満足率モデルの推定により、満足率 80%を満たす場合の距離として、高齢者全体、都心居住希望の高齢者、全年齢ともに、概ね 400m ~ 500mにあることが算出できたと報告があった。地点別の評価値では、重要度が高い警察、交番、郵便局、銀行が近傍に位置する徳島駅周辺の2地点が高く、今後の課題として評価地点を増やすことが挙げられた。

質疑応答の中では、地方都市においては歩いて満足できる距離での施設配置確保は大変で公共交通を軸とし維持することが必要という意見がなされた。

(文責：安永洋一郎)

山間地域の生活利便性評価と居住継続意向に関する基礎分析

塚井 誠人 (広島大学大学院工学研究科 准教授)

現在の居住地よりも生活利便性の高い地域へ住民が移転する居住地の集約施策の可能性を検討するため、中山間地域住民の生活関連サービスの充実や利便性評価の実態及び居住継続意向について、島根県中山間地域研究センターが実施した「生活環境に関するアンケート調査」のデータを活用し分析したものである。



移動と施設に分けて食料品の買い物に関する満足度を集計すると、移動の満足度は近隣ほど高いが、施設の満足度は遠方ほど高い。また居住地を中心部・中間部・縁辺部に分け、移動の満足度と施設の満足度を比較すると、縁辺部の住民の移動満足度が最も低い一方、施設満足度は最も高い。

全体的な居住継続割合は3地域間での差がないが、定住・移住理由は大きく異なる。中心部の住民は地域の愛着が低く、仕事都合による居住者が多い。中間部と縁辺部では、移住理由として医療環境の占める割合が高い。

市町村合併後の変化、中山間地域の中での居住地の再編の可能性、一次生活拠点からの距離や年齢・居住層等属性との相関性について、質疑応答が行われた。

郊外居住者の抱くまちなかイメージとまちなか居住意向：高松における実態調査から

高塚 創 (香川大学大学院 准教授)

中心市街地活性化を居住分野から考えるため、高松市におけるまちなか居住者と郊外居住者に対して「まちなかイメージ調査」を行い、郊外居住者のまちなかに対する先入観と居住意向を高める要因を明らかにしたものである。



まちなか居住者の満足度は、郊外居住者に比して概ね高いが、郊外居住者はそのように認識しておらず、まちなか居住者の「まちなか評価」と郊外居住者の「まちなかイメージ」には乖離(前者に比して後者の評価が大きく下回っている)がある。特に、治安、校区、居心地、住宅広さ、価格・家賃の乖離が顕著である。

その理由は、居住者の嗜好の違い、情報の非対称性に基づくバイアスなどが考えられるが、後者の場合、まちなか居住の快適性をアピールすることがポイントであると考えられ、今後は、そのことの効果について検証する。

そもそも価値観の違いがあるのではないかと、家族形態(専業主婦か否か)などでも評価が異なるのでは、などについて質疑応答が行われた。

(文責：佐伯達郎)

徳島都市圏における世帯の空間分布予測モデルの開発

渡辺 公次郎(徳島大学大学院リカカインズ研究部 助教)

本研究は、土地利用計画支援システム開発の第一段階として、マルチエージェントシステムを用いて、土地利用規制が変更された場合の世帯の空間分布予測モデルを開発することを目的としたものである。



エージェント(世帯主)は、居住するメッシュとそれ以外のメッシュの魅力度を比較し、魅力度が高い方へ移動するもので、土地の魅力度は、利便性、安全性、土地利用規制、税金、世帯密度、周辺土地利用等により表現されるものとした。

開発したモデル式を用いて、徳島東部都市計画区域(線引き)と藍住都市計画区域(非線引き)を対象とし、土地利用規制(区域区分)を変化させた場合の将来予測(2000年-2010年)を実施した結果、藍住都市計画区域に線引きを導入した場合、藍住町全域の世帯数の増加は抑制され、徳島市中心部や藍住町周辺部において世帯数の増加がみられた。また、全域で線引きを廃止した場合は、都心部や国道沿いといった利便性の高い場所で世帯数の増加がみられた。今後はこのモデルをGISと統合させることにより土地利用支援システムを開発する予定である。

質疑応答では、今後、GISとの統合を検討する際は、先行した実績を持つ中山間地域研究センター等とコラボレーションすると良いなどの意見があった。

まちづくりのための自己申告調査システムの提案と評価

張 峻屹(広島大学大学院国際協力研究科 准教授)

本研究は、まちづくり政策の立案に必要な市民や企業の行動、意向等の情報を定期的に、より安価で、安定的に確保できると期待される『自己申告調査システム(行政の指示にしたがって、市民・企業が必要な情報を自己申告するもの)』を提案するとともに、その可能性と課題について、広島県民を対象としたウェブ調査を通じて明らかにするものである。



ウェブ調査結果では、システムに“賛成”と答えた人が39.81%で、“反対”と答えた人10.61%の3.75倍であり、市民にとって受け入れやすいものであることが確認された。また、約3割の被験者が公的機関による調査に対しては個人情報を提供してもよいと回答しているが、一方で、調査協力への謝金を支払うべきとの回答は46.99%となっている。したがって、システム導入においては、謝金に頼らない方法の検討や、インセンティブデザインをどうするかといったことが大切であるものと考えられる。

質疑応答では、収集された個人情報に関わるデータが悪用されないような防止策が重要である等の指摘があった。

(文責:高田禮榮)

考えるプロセスを重視した「公共事業における景観配慮」～山口県公共事業景観形成ガイドラインの策定～

秋月 裕子((株)オオバ九州支店)

本ガイドラインは、山口県が実施する全ての公共事業を対象にした部局横断的な共通指針であり、景観行政団体となる市町への展開も踏まえたものである。



山口県では、地域主体の景観形成の取組を重視し、市町との連携・協力等の関係について手引きとして示した。公共事業において景観を配慮することは、特別なことを別途行うことではない。記載する内容は、事業担当者が考える道しるべとしての役割をはたすことのできる内容に徹した。

本手引きは、基準書ではなく事業担当者が失敗しないためのものであり、使いやすくわかりやすいよう、4つの分野と分野共通に区分し、各分野の施設に共通して求められる視点と個々の施設や要素別に必要となる着眼点を具体的に示した。また、景観形成のプロセスを経ることで、自己評価と第三者評価が実施できる仕組みとなっている。

今後、県としての継続的な取組に加え、全県的な景観形成への取組が一層進むことが期待される。

質疑応答の中で、会場から、より良い景観形成を展開するためには、それを担保する制度づくりも重要であるとの意見があった。

都市計画学会中四国支部リレーシンポジウム

第1回「水辺の景観・活用・治水」を終えて

熊谷 昌彦(米子工業高等専門学校建築学科 教授)

本報告では、松江で開催された第1回のシンポジウム「水辺の景観・活用・治水」での検討を中海宍道湖地域の全体構想へとつなげるために、シンポジウムの講演者とパネリストの発表内容を3つの視点から紹介する。



1. 水辺の景観を生物多様性という観点から見た生態学的意味として、自然景観の再生が指摘される。
2. オランダの事例のように、人工環境と自然環境の区別がつかない水辺空間のデザインと都市構造が参考となる。
3. 水辺を大切にしたい街を維持し続けるには、地域のリスクの認識と災害に備えたコミュニティなどの文化の育成が求められる。

これらの事項が、官学民の連携により、新たなNPO法人やまつえまちづくり塾、自主防災組織の育成などの活動を生み出しつつある。質疑応答の中では、シンポジウムのフォローアップが地域にどのようにつながったのかとの問いがあり、自然再生センターや中海再生プロジェクトなどのNPO法人の具体的な取組みについての説明があった。行事開催の後のフォローアップの有効性を示された貴重な報告であった。

(文責:長谷山弘志)

ベトナムにおける「道の駅」の可能性

岡 英紀(広島大学大学院国際協力研究科・博士課程前期)

ベトナムにおける「道の駅」では、都市間移動の多くをバスに頼っている点に注目し、「役割や機能が日本の道の駅とは異なる」という仮設のもとに、利用者へのインタビュー調査を行い、分析を通して、ベトナム型道の駅への提言を行う。利用者意向の特徴には、立ち寄り頻度が、2-3時間、3-4時間に一度が大半を占め(日本と比べ非常に少ない)、清潔なトイレやバスに関する情報発信が望まれている。サービスの質の要因分析では、施設全体の満足度には、売店やレストランの質の向上が重要である。また支払い意思額(WTP)の分析結果、トイレ:15円、売店300円、レストラン:250円であり、ベトナム人の道の駅に十分な価値を見出していることがわかる。(日本円は概数換算)



提言として、清潔なトイレ、リラックスできるレストラン、特産品や必需品を扱う良質な売店(WTPが高い)、情報発信設備(特にバス路線、時刻)以上の設置を行うべきである。

広島市学校モビリティマネジメントの取組みと効果

藤原章正(広島大学大学院国際協力研究科 教授)

クルマ利用から公共交通利用への自発的転換を促す施策(モビリティマネジメント)を、広島市内小学校の「総合的な学習の時間」等を活用してモデル的に実施した。授業の狙いは、地球温暖化(CO2問題)とクルマ利用の関連性(問題)の理解、公共交通利用による社会性(マナー)の教育、子ども達の(改善への)行動喚起と社会貢献へのやりがい実感である。授業内容は、出前講座(地球温暖化解説、環境配慮型自動車の紹介) 教諭授業(人の交通行動とCO2発生メカニズム解説、公共交通の乗り方学習) 校外学習(人や環境にやさしい電車やバスの乗車体験) 「交通すごろく」による授業(交通機関の選択・実行の疑似体験ゲーム) まとめ(ポスター作成) 実施前後のアンケート調査から、「公共交通利用の方が良い」とする意見は3割から9割弱となり、大きな意識変化が確認された。また家に帰って体験を聞いた保護者にもこの傾向が見られ、他校への水平展開、企業や地域への波及が期待される。折しも道路財源や原油高の課題対応に迫れる今日にあって、社会と接点も持ったカリキュラムの開発・普及は待ったなしと思われる。



(文責:宮迫勇次)



第6回日本都市計画学会中国四国支部研究発表会の様子
平成20(2008)年5月10日(土) 広島市中区 ホテル法華クラブ



中国四国支部連携事業シンポジウム

テーマ：坂の上の雲まちづくりと都市景観整備
 日時：平成20年6月14日(土)14時 17時
 場所：松山市子規記念博物館2階会議室

開催にあたって

日本都市計画学会中国四国支部長 松波龍一

リレーシンポジウムは、中国四国支部の連携事業である。実施目的のひとつは、普段、連携が図りにくい中国と四国との交流を深めること。この点は、本日も広島からの参加者が多く、大成功と言える。



また昨年度は「公共空間とまちづくり」という共通テーマでリレーシンポジウムを実施してきたが、内容について一切規定しなかった。そのため、各地の特色に応じ、水辺空間、街路市、道路や公園を占有したオープンカフェ、都心の回遊性等、多くの切り口からテーマを掘り下げ、実施して頂いた。ローカルな切り口というのは都市計画で極めて重要。この点においても大成功であった。

本日も、新しい道筋を、この松山で示して頂けるものと期待している。

基調講演

『坂の上の雲』のまちづくり

松山市坂の上の雲まちづくり担当部長 松本啓治

松本氏には、松山市において、新たな魅力創造として取り組まれている『坂の上の雲』を題材としたまちづくりについて、講演頂いた。



1. 小説『坂の上の雲』

小説『坂の上の雲』は、司馬遼太郎氏の代表作といわれる作品で、昭和43年から4年3ヶ月かけて、産経新聞夕刊に連載された。物語では、松山出身の正岡子規、秋山好古、秋山真之の3人の人生を軸に、懸命に近代国家の仲間入りを目指した明治日本の姿が描かれている。平成21年秋からは、NHKでスペシャルドラマの放映が予定されている。その豪華な配役を見ると、NHKも非常に力を入れていることが伺え、今後、一層話題性が増すものと期待している。

2. フィールドミュージアム構想

松山市では、平成11年度より『坂の上の雲』を軸としたまちづくりに取り組んでいる。その基本的な考え方が「フィールドミュージアム構想」。市内には作品に関係ある多く

の資源が点在しており、これを活かし、市内全域を屋根のない博物館にしようという取り組みである。

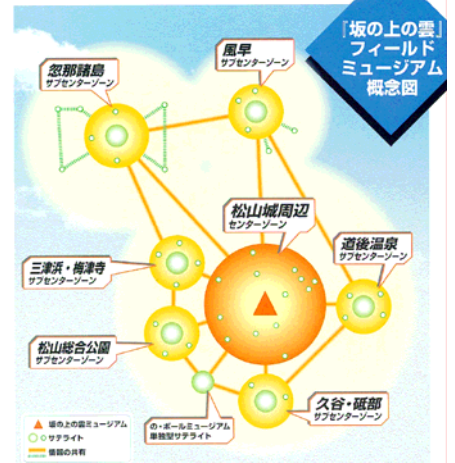
構想では、市域を7つのゾーンに分け、それぞれが持つ個性や資源を発掘・再評価するとともに、ネットワーク化を図ることで、回遊性や賑わいの創出を目指している。

その一例が、「センターゾーン(松山城周辺)」に位置する「ロープウェイ通り」。当地では、地域住民と行政が相当数の協議を重ね、道路空間の再配分や景観づくりに取り組み、歩行者に優しい町並みを整備。現在は、「大名・武者行列」や「お城下ウォーク」など多くの市民参加型イベントで活用されている。

その他にも、市民が憩える空間として「堀之内公園」整備、まちづくり活動の拠点機能をもつ「坂の上の雲ミュージアム」整備、また「サブセンターゾーン(道後温泉)」の「道後温泉本館周辺の歩行者空間整備等」を行っている。

一方、『坂の上の雲』まちづくりの命題は、地域の資源をどう発掘するかという点である。そのため、久谷の旧遍路宿「坂本屋」再生や三津浜の町屋・古い蔵を活用した地域の魅力づくり等、地域の素材を使った住民主体のまちづくり活動に対して支援を行っている。このような地域活動が多く生まれてくることで、フィールドミュージアムが充実すると思う。

これら『坂の上の雲』のまちづくりの取り組みに対し、先日、国土交通省より、第3回まち交大賞の計画大賞(国土交通大臣賞)を頂いた。『坂の上の雲』というキーワードで上手く地域資源をネットワークさせ、回遊性向上に結びつけた点が評価されたと考える。



フィールドミュージアム構想



ロープウェイ通り



会場の様子

パネルディスカッション

パネラー：松山市都市整備部総合交通課	石井朋紀
松山市都市整備部都市開発課	渡部浩文
道後温泉誇れるまちづくり推進協議会	宮崎光彦
コメンテーター：日本都市計画学会中国四国支部長	松波龍一
コーディネーター：愛媛大学大学院理工学研究科教授	柏谷増男

話題提供

「道路空間を軸にした景観整備」 石井朋紀

「道後温泉本館周辺」では、地元 10 団体が協議会を立ち上げ、住民主導で景観計画づくりを実施。市は、模型やシミュレーション等を活用し、地元住民とコミュニケーションを図りながら、まちづくりを支援している。昨年度、道後温泉本館前において歩行者優先の空間整備が完成。これにより、観光客等の快適性や安全性が大きく向上した。



また「ロープウェイ通り」でも、地元と連携して歩行者に優しい空間の整備、具体的には車線数の削減、歩道拡幅、電線地中化、荷捌きスペース整備等を実施した。商業者へアンケートをとると、事業に伴い来客数は約 3 割伸びていた。が、売上げは減少という結果に。しかし実際は、多少売上げも増えたのではないかと思う。

空間整備の事業でクルマ利用を抑制すると、未だ反発も多い。しかし成功事例が増えると、徐々に地元の理解も得られ易くなるのではないだろうか。

「道後温泉周辺のファサード整備事業」 渡部浩文

「道後温泉周辺」では、地元協議会の「景観まちづくり宣言」に応え、ファサード整備事業を推進している。その整備方針、ガイドライン等の検討・策定も地元住民主導で実施し、市はサポートに徹した。また市では、ファサード整備に要する費用の補助の枠組みを構築(上限 300 万円)その際も、住民要望を十分踏まえ、歩行者や生活者の視点に立った補助率設定を行っている。



更に地元協議会からの補助(上限 10 万円)や地元銀行によるファサード整備専用の商品開発などの支援も得ている。また企業の自主的な看板撤去も進んでいる。

ファサード整備では、地元の方々がまちづくりを自ら行っているという実感を持つことが大事。地元が動くからこそ、民間団体や企業の協力、自主的な看板撤去等に結びついたであろう。

「地元からみた道後地区の課題」 宮崎光彦

これまで道後温泉周辺では、地元主体の「道後温泉誇れるまちづくり推進協議会」において、ランドデザイン策定から景観計画、賑わい創出イベント等々、多様な取り組みを実施してきた。現在は「道後百年の“景”」をキーワードに、景観まちづくりを推進中。これらを経て、また多くの旅館の協力もあり、今や多くの観光客が浴衣で外湯を楽しめる賑わい空間が形成されている。



景観形成にあたっては、地元商店等の協力が不可欠だが、賛同を得られない場合もある。そのため、地域全体で取り組まないといけない、という雰囲気づくりが課題。またマンション建設や風俗店の看板等の規制など、課題は少なくない。

意見交換

景観整備後の運用ルールのあり方や、市全体からみた景観まちづくりの状況に関するコメントがあった。前者に対して、例えば沿道商業者がオープンカフェを展開する等は、賑わい創出に良いという点、また個店の利益ではなく、まちづくり目的であれば、行政も承認せざるを得ない点が議論された。また後者に対しては、市全体の基本計画はあるが、未だ力不足であることが否めない点、景観では視点場の存在が重要であり、その開発や保存方法等について検討していることが示された。

フロアからは、経費面からファサード整備に賛同が得られないという課題に対し、「花や緑」を活用した安価な景観形成の手法の事例が紹介された。

現地見学会(道後温泉駅・本館周辺)

道後温泉駅周辺や本館周辺における現地見学を行った。整備前に比べ、歩行時の快適さは勿論、景観面でも心地よく、かつ“若返った”印象を受けた。さらに、浴衣姿で歩く観光客さえも“若返った”ことが、当地の成功を物語っていた。

(文責：田中雅宣)



平成20年度 第1回 都市計画サロン

プログラム：“交通と持続可能なまちづくり”

広島工業大学 環境学部 地域環境学科
教授 青山 吉隆 氏

日時：平成20年4月19日(土) 16:00~17:30
場所：コンフォートホテル広島 2階 会議室
主催：日本都市計画学会 中国四国支部

中国四国支部では、都市計画サロンと称し、気軽に集まれる講演会として年に3回行なっている。

今回は、「交通と持続可能なまちづくり」という題目で、広島工業大学 教授 青山吉隆氏に講演していただいた。



1 サロンの要旨

講演の内容は、「交通と持続可能なまちづくり」という題目だった。これは、氏が環境省地球環境総合研究推進費で研究されたことと、氏の出版された「LRT と持続可能なまちづくり(学芸出版社)」の内容を中心に話された。

持続可能な社会というのは、氏の定義によると、将来の世代の欲求を満たす能力を損なうことなく、現世代の欲求を満たす社会を作るということを示す。豊かさと環境負荷のディカップリングつまり、環境を悪化させないで、豊かなまちを作るということであり、モビリティを向上させても、環境負荷を増やさない、脱相関関係にすることだ。

実際、20世紀型都市は、モータリゼーションと共に進められ、道路整備が進み、都市構造は自動車依存型へと変化しながら拡大成長してきた。現在も、経済発展途上にある各国で同じ変化が急速に進行中だ。また、CO2排出の割合でも、全体の22%を運輸部門が占めており、そのうち85%が自動車が排出しているCO2だ。(環境省、平成16年環境白書より)また、ガソリンの使用量についても、pass・100kmあたりについて、一般乗用車が8.3l、バスが1.4l、トラムが0.35lと、乗用車は明らかにガソリンを多く消費するという点で、環境負荷が高い。

自動車依存都市の課題は、スプロールすることにより地方中小規模の都市の中心市街地が衰退し、都市に投資しても今日の投資が明日の生活を豊かにするとは限らない、持続不可能な社会構造であるということだ。

また、日本の課題として、ヨーロッパのように「公共交通には税金を投入するもの」という市民意識がないため、地方部で鉄道やバスの廃止問題が課題になってきており、一部では第3セクターを通じるなどした公共交通への税金つぎ込みが始まってきていること、ヨーロッパでLRTが成功してきたが、日本でも成功するのかという疑問があること、ヨーロッパでは長期的視野を備えた首長の公約で十分に時間をかけて市民の合意形成の上LRTが敷設されて

いるが、日本ではリーダーシップを持った首長が意欲的にLRTを進めるといことはなかなかないことなどといった問題点がある。(ちなみに、フランスでは、地方選挙が行なわれる前の年に公共交通の整備延長が伸びる)

課題解決方法としては、自動車依存型都市構造から公共交通機関を中心に自転車や歩行者を優先する都市構造へ変えていくことである。

ただし、道路空間をリストラして公共交通、自転車、歩行者のための空間にしていき、コンパクトシティに代表される都市構造に変えていくには、その公共交通機関が自動車と比較しても遜色なく、消費者に選考されるだけの魅力を備えていなければ、交通市場に生き残れない。

例えば、フライブルグでは車とトラムと環境など5つの施策をパッケージにして同時に進めているし、ストラスブールでは、市民参加の手法で合意形成し、美観的にもLRTの停留所をランドマークになる良いデザインのものにした。線路敷きを緑化したり、路線沿いの街の広告規制し、ニースでは、LRTの色彩と街路空間の色彩を合わせ、美観



ニース トラムと街路空間の色彩

線無くすなどといった、それぞれの街で、美しさ、デザイン、快適性をセットで考えている。美しく、快適で、街が賑わい、皆がプラスに感じることで財源を確保していく、そのような構造が必要だ。

2 講演を踏まえての議論

パリのレンタル自転車の実現手法についての問いに対して、広告設置の権利とレンタル事業をセットにした企業との契約で実施されており、パリ市の負担は無いとのことだった。CO2の取引が始まっているが、環境への関心が高まっている今、政策のパッケージ化はしやすいのではないかなどといった意見が出た。

(文責：福馬晶子)



ホットコーナー

華麗なるペルシャ旅行で見た国造り

杉恵 頼寧

今年3月24日から1週間ほどイランを旅行し、シラズ(ペルセポリス)、イスファハン、ヤズド、テヘランの4都市を訪れた。テヘランへは成田からソウル経由でイラン航空の直行便があり、14時間の所要時間である。イランはイスラム教の厳格な国で、国内では飲酒が禁止されており、機内でもアルコール類は提供されなかった。服装も厳しく、女性にはスカーフ着用が義務付けられている。機内でも着陸1時間前にその着用要請がアナウンスされた。

イラン訪問時は、イラン暦の正月明けで、観光地はイラン人の観光客で溢れ、どこも人と車で大混雑だった。街中は、外国の有名ブランド等の広告看板が非常に少なく、すっきりしていて感じがよかった。女性の多くはチャードルと呼ばれる黒い布で、頭から足首まですっぽり覆っている。夏の暑いときは大変だなと思った。

最初に訪問したシラズはテヘランの南方約600kmに位置し、バラの花で有名な古都である。バラの季節ではなかったのですが、その代わりバラの花を模様化した彩色タイル(下の写真)が美しいヴァキール寺院(別名バラ寺院)を見学し、その後シラズの北60kmの所にあるペルセポリスを訪れた。



ペルセポリスの中心は紀元前6世紀後半、アケメネス朝ペルシャのダレイオス1世が建設を始めた総面積約12.5万㎡の宮殿である。当時の行政上の首都はスーサだったが、宗教的な首都として当地に築かれ、即位式や正月の祭儀など重要な儀式はここで行われた。しかし、紀元前330年、ダレイオス3世がアレキサンドロス大王との戦いで敗れ、廃墟と化してしまった。



(空に向かってそびえる「謁見の間」の柱)

20世紀に入ってから発掘が進められ、当時のペルシャ帝国の栄華が偲ばれるほどきれいに修復されている。しかし、イスラム教アラブの侵入によって、地表に出ていた彫刻や遺跡のレリーフに刻まれた人物や動物の顔が、多く潰されてしまったのは残念である。地中に埋もれていて破壊を免れた遺物は、これまでに掘り出され、修復保存されている。

アレキサンドロス大王とダレイオス3世の戦いの様子は、ナポリにある国立考古学博物館の大モザイク画(ポンペイ出土)で見たことがあるので、このイランを代表する世界遺産を実際に見る事ができたのは、感慨深いものであった。



(左の若者がアレキサンドロス、右の馬上の人がダレイオス3世)

次に訪れたイスファハンは、ちょうどテヘランとシラズの間位置する古都である。この都市の栄華は、1597年サファヴィ朝の王、アッバス大帝がこの地を首都に定めたことに始まる。大帝は、自らの基本計画のもとに都市計画を推進した。イマーム広場を中心に、宮殿や寺院、バザール、橋など、壮大な街並みが造りだされていった。

その中で、イマーム広場は、「世界の半分がある」と言われたほど美しい広場である。同一様式の回廊が広場を取り囲み、シェイフ・ロストウフォッラー寺院、アーリー・ガープール宮殿、イマーム寺院、バザールといったイスファハンの重要な歴史的建築物が、それぞれ東西南北の中央に位置している。回廊部分の1階には、絨緞や工芸品など、さまざまな土産物店が軒を連ねている。

510m x 163mの広大な広場は、かつて外国使節との会見、軍隊の観閲式や凱旋儀式、ポロ競技、公開の処刑などが行われた。現在は、噴水、大小の池、緑地等が整然と配置され、市民や観光客の憩いの場になっている。ただ、観光馬車がかなりの速度で周回しており、のんびり散策するのに少し危険であったのは残念である。



(シェイフ・ロストウフォッラー寺院を背景としたイマーム広場)

広場の景観ポイントとなるイマーム寺院は、昼間逆光であまり見えなかったが、夜はライトアップされて景観が一変し、本来の美しさを見せていた。まさにイランの芸術と寺院建築を極めた、サファヴィ朝時代を代表する建築物で、アッバス大帝の死後1638年に完成した。



(宮殿のテラスから見たイマーム寺院、左が正面入口)

イスラム寺院のタイルは、どこへ行っても美しいが、特にイマーム広場に面したイマーム寺院正面入口の門には驚かされた。天井の「蜂の巣状の鍾乳石飾り」は本当に見事なできである。しかし、これは広場のための装飾的な門にすぎず、メッカの方向に向けた正式のものは、この門をくぐり、短い回廊を抜けて中庭に出ると、美しいドームとともにその姿を現す。



(イマーム寺院正面入り口天井の鍾乳石飾り)

イスファハン市街の中央を東西にザーヤンデ川が流れており、多くの美しい橋が架かっている。泊まったホテルの近くに架かっているのが、アッバス大帝の時代、1602年に完成したという長さ300m、幅14mのスィ・オ・セ橋である。ペルシャ語でスィ・オ・セとは33を意味しており、



(33のアーチが美しいスィ・オ・セ橋)

橋上部のアーチが33あることからこの名がついた。車の進入は禁止されているので、いつも人通りが絶えず、賑わいの場になっている。川の兩岸は公園や緑地として整備され、橋の美しさとマッチしながら、ザーヤンデ川一帯の景観美を創出するのに一役買っている。



(ザーヤンデ川沿いに整備された河岸緑地と公園)

スィ・オ・セ橋の東2kmの所にあるのがハーजू橋である。長さ133m、幅12mの2層構造になっており、1666年に完成した。上層部は、夏の夜に王がしばしば宴を張ったというテラスが設けられている。下層部は川の水量を調整する水門の役割を果たしている。上部も下部も歩いて渡れるようになっている。水辺にも近づくことができるように石段が設けられており、水遊びをする若い人が多く見られた。ライトアップされる夜の姿も美しく、ザーヤンデ川の橋の中で最も印象に残る橋の一つである。



(中央のテラスで王が宴を張ったハーजू橋)

その次に訪問したのは、ゾロアスター教(拝火教)の中心都市ヤズドである。今なお多くの信者が住んでおり、夏は日差しが非常に強い砂漠都市である。地理的には、イランの中央部に位置し、イスファハンから、途中「らくだの隊商宿」跡に立ち寄りながら、荒野の中を西へ320キロ、長距離バス移動であった。

この町の日市街は、イラン南東部のバム(2003年の地震で崩壊し、現在復興中)とともに、日干しレンガの上から土で塗り固めた古い家屋が多く残されており、現在保存再生が進められている。ここでは、迷路のように小路が入り組み、ところどころ町のアクセントのように「風採り塔」がそびえる街並みは、ページュの土色ながら美しく輝いていた。



(土で塗り固めた古い住宅街の小路)

個々の住宅は、夏と冬の空間が明確に区別され、気候への配慮がなされている。夏の昼間は非常に暑いので、通常地下室の北向きの広間が使われる。そこに風採り塔から吹き込んだ涼風があちこちの換気口から吹き出す。冬は、南向きの部屋や縁側の空間が使われる。



(「風採り塔」が立ち並ぶ旧市街)

イスラム教では、女性が家族以外の男性の前に出ることを嫌う。これを配慮して、住宅の入り口は大きな扉がはめ込まれ、その真ん中に左右非対称の二つのノッカーが付けられている。その左が男性、右が女性の訪問客用になっていて、音色が違っている。高音が女性客、低音が男性客の到来を告げる。



(玄関扉の二つのノッカー)

最後に訪れたテヘランは、カスピ海の南に位置するイランの首都(1795年開都)で、全人口の10%、650万人を超える人口を有する大都会である。都心では、近代的なビルが立ち並び、幹線道路は広幅員で整備されている。地下鉄も1999年に初めて開通し、現在は3路線が運行しているが、他の大都市と同様、道路はどこも渋滞している。

ここでの観光は、イランを代表する博物館巡りが中心となる。そこで、まずイラン考古学博物館を訪れた。イスラム化以前の展示品を集めた本館を見て回ったが、全体的に展示品が少なかった。期待していた紀元前550~330年のアケメネス朝時代のものは、いずれも保存状態のよいものであったが、その数はやはりあまり多くなく、少しがっかりした。

その後、市内を回っているうち、画期的なバス輸送システムを発見した。これは、広幅員道路の中央に1車線分の空間を取ってバス専用のバス駅(停)を設け、その両側の車線をバス専用道として利用するものである。専用道の外側は、従来通り一般車両が利用する。専用道は信号交差点ごとに分断され、バスは専用道から一般街路に出入りできるようになっている。乗客も交差点から駅にアクセスする。駅舎はかなり長く、内部は行先別に乗り口が分かれている。

専用道では、ひっきりなしにバスが高速で走っている。定時性が従来のバスより優れているので、地下鉄に近い役割を果たしているものと考えられる。ブラジルのクリチバのバス輸送システムを参考にしたものと思われ、名古屋の基幹バス方式より一段進んだシステムで、興味深かった。



(広幅員幹線道路の中央に設置されたバス駅)



(バス駅の出入り口と設置された自動改札機)

テヘランを最後に、その夜遅くイマーム・ホメイニ新空港から帰国の途に着いた。

参考書：地球の歩き方 イランペルシャの旅、ダイヤモンド社

会員紹介

藤原 章正(ふじわら あきまさ)

広島大学大学院国際協力研究科 教授
生い立ち

岡山県赤磐市生まれ。1979年に広島大学入学以降、ほぼ広島で過ごしています。

研究の生い立ち

1980年代当時、盛んに研究されていた「非集計モデル」「アクティビティ分析」に魅せられて、交通行動分析の研究を行ってきました。1994年に大学院国際協力研究科に異動してからは、より実務に近い研究として、交通調査、交通安全、交通需要マネジメント、国際環境協力などのテーマへと守備範囲を広げてきました。

技術は人なり

道路特定財源の問題をはじめ、交通技術者がプロフェッショナルとしての自信と誇りを失いつつあるようです。青山士の「技術は人なり」を銘に、国境を越えた人材育成に取り組んでいます。

低炭素社会を設計する国際環境リーダーの育成

地球温暖化対策の実現にあたって、途上国と先進国の基本姿勢には検討すべき課題が残されています。2008年から5年間、地球規模の問題である低炭素社会の実現を事例として、国際的視野で戦略的解決策を設計する環境リーダー育成プログラムを開始しました。

グローバルインターンシップ

これからの計画者・技術者には間違いなく国境を越えた視座が求められます。感度の鋭い学生時代に途上国での研修を体験させる教育方法として、「グローバルインターンシップ」プログラムを行っています。1~2ヶ月の研修で学生たちは見違える様に成長します。

研究室

工学研究科の社会基盤計画学研究室と合同で研究体を組み、計5ヶ国30名を超える学生たちと研究を行っています。また、2008年度からはアジアモビリティ安全プロジェクト研究センターを設立し、交通安全にかかわる研究、教育に関心のある教員や実務者に学内外から参画していただいて活動を開始しました。

大学運営や社会貢献への要請が年々高まり、オーバーフローしそうですが、「私」の外の空間を「公共」として広くとらえ、国際協力を含めた公共政策を、交通計画の視点から学生たちと一緒に全うしたいと考えています。



会員紹介

藤岡 憲三(ふじおか けんぞう)

株式会社地域計画工房 代表取締役
略歴

1950年生 / 広島県神石高原町出身 / 73年3月広島大学工学部建築学科卒業 / 73~74年建築設計事務所勤務 / 75~83年建設コンサルタント勤務 / 83年8月独立(株まちづくり計画研究所) / 2000年2社合流(株地域計画工房 現在に至る会社

社員は10名、都市・地域計画に従事したい者の集まりで、会社は、そのための媒体と考えています。

地域密着、現場主義を重視しています。

動機

大学入学時(1969年)は、大学紛争中で、多くの友人と同様に「勉強することは資本主義社会で出世するため」と病んだ気分でした。故西山卯三先生の「地域空間論」に触れ、暗闇に光明を見る思いがしました。その後、「生活環境の向上」を個人的主要テーマに、仕事に従事しています。

業務経歴

1975年広島圏都市計画基礎調査に始まり、区域区分、地域地区、地区計画に関する調査、立案など、一貫して法定都市計画に関する業務に従事してきました。

また、段原地区住宅対策(環境整備モデル事業関連 76~77年)、沼田地区まちづくり活動推進業務(コンサルタント派遣 86~91年)、住宅マスタープランなど多様な業務に関わることができましたが、これは、地方で活動するコンサルタントのメリットだったとふり返っています。

地域活動

コンサルタント派遣、地域づくりの支援などは、直接、地域住民の方々と対話、議論しながら進める仕事で、通常受託業務とは異なった緊張感、実在感を伴います。

そうした業務を契機として、地域の自治会などから継続して関与することを要請されることがあります。

地域の方が熱心に取り組まれ、自分も関与し続けた奥畑地区(安佐南区沼田町)の「ホテルの里づくり」が平成8年度ひろしま街づくりデザイン賞を受賞されたことは、大きな誇りです。

学会支部との関わり

中国四国支部の設立には、都市計画に関する意見交換、業務の質向上などの観点から賛同しました。昨年度からの受託業務「市民による地区別まちづくり構想検討・作成支援業務」(広島市)は大きな意義があるものと考えます。

都市計画に関わる多くの人が学会活動に参加し、知識や人間関係を広げて欲しいと思います。



会社の様子



奥畑ホテル公園の清掃活動

今後の活動計画

第2回幹事会

日時：2008年7月26日(土) 13:30~15:15

場所：コンフォートホテル広島 会議室A

特別講演会

テーマ：高齢者の都心居住のための都市環境整備 - 徳島市における生活環境施設整備を事例として -

日時：2008年7月26日(土) 15:30~17:30

場所：コンフォートホテル広島 会議室A

講演者：近藤光男(徳島大学教授)

第1回都市計画研究会

テーマ：「生活交通とまちづくり」

日時：2008年8月30日(土) 14:00~16:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

講演者：増田泉子(中国新聞社)

支部連携行事 中国・四国リレーシンポジウム「公共空間とまちづくり」(第7回) & 見学会; 宇部市

テーマ：「それぞれのまち、それぞれの姿」(仮)

日時：2008年10月4日(土) 13:00~17:00

シンポ+見学会の開始・終了予定時間：13:00~17:00

注1) シンポジウム終了後に見学会を実施します。

注2) 開始時刻、終了時刻は変更の可能性があります。

注3) 懇親会(検討中)

場所：宇部市文化会館 研修ホール

話題提供：最近の公共空間整備(宇部市 石井 裕 課長)

パネルディスカッション

パネラー：石井 裕 氏(宇部市まちづくり推進課 課長)

坂本紘二 氏(下関市立大学 学長)

佐藤俊雄 氏(中国地方総合研究センター地域計画研究部 部長)

脇 和也 氏(宇部日报社：代表取締役専務)

(アイウエオ順)

コーディネーター：田村洋一(山口大学)

編集後記

紫陽花が路傍を彩り、蛍が清流に舞う。憂鬱な梅雨にも心和むひとときを感じます。

中国四国支部も第6回通常総会を終え、平成20年度の学会支部活動が本格始動しました。研究発表会も多分野からのテーマで10編の論文発表があり、講演者とフロアとの間で活発な討論がなされました。夕方からの懇親会にはたくさんの参加があり、議論は最高潮に達していました。

さて、今回のニュースレターはいかがでしたでしょうか。ホットコーナーでは前支部長で顧問の杉恵頼寧先生に執筆していただき、イランにおけるまちづくりと公共交通について紹介していただきました。歴史と文化が融合した優美な都市の様子が、鮮やかな写真から髣髴することができます。訪れる機会の少ない国ですので、興味深く読ませていただきました。

また今回号から編集委員に石村壽浩氏が参加されることになりました。編集委員の若手ホープとして、これから様々な誌面で活躍していただけたと思います。

ところで次号ニュースレターは第20号となります。早いもので会員の皆様のご協力のもと、このニュースレターも5年間の蓄積となりました。支部ホームページにはバックナンバーも掲載していますので、もう一度ニュースレターを通じて支部活動の足跡を振り返ってみてはいかがでしょうか。



第6回通常総会懇親会参加の皆さん

編集委員：周藤浩司(編集長)、石村壽浩、佐伯達郎、佐藤俊雄、高田禮榮、長谷山弘志、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也

